

衣袋健司 (著)

腹部血管画像解剖アトラス

松井 修

金沢大名誉教授

私の畏友、三井記念病院放射線診断科部長 衣袋健司先生が、待望の腹部血管画像解剖の教科書をついに出版された。世界初ともいえる腹部の最新の画像解剖と肉眼解剖の対比から成る画期的な教科書といえる。

先生は長く臨床の第一線で腹部を中心として interventional radiology (IVR) と画像診断に従事され、示唆に富む知見や新しい技術を報告されてきた。その独特の視点や理論的背景の確かさから、“知る人ぞ知る” 気鋭の臨床放射線科医としてわれわれの間では高く評価されてきた。その背景に深い肉眼解剖学の研究があることを知り感銘を受けたことを思い出す。先生は、第一線臨床の傍ら、週末には母校・東京医科歯科大の解剖学教室で実際に死体解剖を長年行い、臨床放射線科医の立場から、肉眼解剖に基づいた新しい画像解剖所見を見出し発表されてこられたのである。その重みは計り知れない。

血管解剖は画像診断の基本として極めて重要であることは論を俟たないが、多くの肉眼解剖書は主たる(太い)血管の解剖を記載するのみであり、また観察個体数にも限りが

ある。一方で、最新の CT や血管造影診断では造影剤を用いれば 0.5~1 mm 前後の脈管も同定が可能で、また多くの症例での解析が可能である。さらに種々の病的な状態では画像診断で初めて観察が可能であることも少なくない。こうした状況下で、その容易さも相俟って、画像診断での血管解剖解析が主流となり、肉眼解剖での研究はほとんどなされなくなりつつある。しかしながらここには重大な盲点がある。画像診断では血管周辺の実質臓器は描出されるものの、間質組織や血管が走行する靱帯や間膜、これらに随伴するリンパ管や神経などは認知が容易ではない。血管とその周辺環境の理解から初めて明らかになる病理・病態は多い。またその理解の上で手技を行うことは、外科手術や IVR には必須である。グレイスケールのデジタル画像で得られた血管像とともにその周辺の肉眼解剖を想起することは臨床医にとって必須であろう。しかしながら、画像診断の進歩が逆にこうしたアナログの重要性の理解を低下させている危惧がある。本書はこうした点で極めて重要でかつ画期的な意義

を有するといえる。加えて、画像診断では、従来の肉眼解剖や外科手術では認知や解析が困難であった微細な血管が種々の病態で明らかになることがある。これらの解析には、専門的な意図を持って改めて肉眼解剖を観察することで、肉眼解剖の立場で新しい知見が得られることになる。例えば、肝外動脈からの側副血行路の肉眼解剖は近年まで明確に記載されていなかったが、画像診断からの知見を基に改めて肉眼解剖で観察すれば、靱帯や肝被膜を介する肝動脈終末枝と肝外動脈の吻合の存在やルートを容易に明確にすることができる(本書中 p.37~43)。本書にはこうした点でも極めて有用な知見が多く記載されている。

腹部疾患に関わる全ての医師、特に画像診断、IVR や外科手術にかかわる若い医師に座右の書として強く推薦するものである。

●B5/頁 160/2017 年

定価：本体 10,000 円+税

[ISBN978-4-260-03057-1]

医学書院 刊